

## 《優秀賞講演》

座長：神田 清子（群馬大院・保・看護学）

高齡がん患者の電話対応における外科外来での取り組み  
—患者対応シートの作成を通して—岸 恵美, 福田 未来, 廣河原陽子  
水出英薫子, 星河 幸代

(群馬大医・附属病院)

【背景】人口の高齢化・医療技術の進歩・平均在院日数の短縮化によりセルフケアが確立しない状況で、地域で生活している患者が増加している。そのため、電話による症状相談は多い。電話対応は直接顔が見えない中での情報収集のため、看護師は困難を感じていた。中でも高齢者の電話対応は訴えにまとまりがないため、情報収集に難渋していた。電話対応において効率的な情報収集を行うため相談内容の実態を調査し、その結果を基に「電話対応患者・予約外患者状態把握シート」(以下患者対応シート)を作成するに至った。患者対応シートを活用し、評価したので報告する。【方法】外科外来看護師が対応した電話件数・内容を1ヵ月間調査し、患者対応シートを作成。3ヵ月間使用後、外来看護師・医師にアンケート調査し使用状況を分析した。【結果】電話件数は129件であり、その半数を消化器外科の患者が占めていた。患者対応シートの使用により、電話対応において情報収集がスムーズになり負担感が軽減された。【考察】消化器外科患者は高齢者が多数を占め、セルフケアが確立していない患者が多い。地域での生活を支援していくには電話相談は重要であり、効率的な情報収集能力が求められる。【結語】患者対応シートを活用し情報を整理する事で、統一した情報を医師へ確実に伝達できる。

## 《一般演題》

## 第1群 看取りを通した看護師の関わり

座長：布施 正子（利根中央病院 看護部長）

## 1. 看取り看護におけるA病棟看護師の気づき ～デスカンファレンスを継続したことによる効果～

千葉いづみ, 松沼 晶子, 吉澤 政史  
藤本 瞳 (群馬県立がんセンター)

【目的】2013年8月からデスカンファレンス(以下DCと示す)を開催。継続したDCの内容を分析し、看取りの看護についてA病棟看護師の気づきを明らかにする。【方法】A病棟看護師18名にDCシートを配布し、患者・家族についての意見の記入を依頼した。DC参加者は、看護師、担当医、臨床心理士などで、出された意見を詳細に記録した。DCシートや記録から内容分析を行った。【倫理的

配慮】A病院倫理委員会の承認を受けた。(承認番号405-28068)【結果】175個のコードから47個のサブカテゴリ、9個のカテゴリを抽出し、『患者へのケア』『家族へのケア』『患者家族共通のケア』『看護師個人の負担』の四つのコアカテゴリに分類した。『看護師個人の負担』では、看取り看護におけるプライマリー看護師の重圧、他の看護師に申し訳ない思いを抱いていた。【考察】今回、看護師の葛藤やジレンマに関するカテゴリが多く抽出された。死に臨む終末期がん患者の苦しみを軽減しようとするケアの中で、患者からの怒りや無謀な要求に対し、自分の感情を表出できない苦しみを抱えていた。DCでは、看護師の本音をお互い共有することで認め合うことができ、継続することで葛藤やジレンマの蓄積の回避に繋がると考える。

## 2. 悪性軟部腫瘍の患者の告知から看取りまでの看護における緩和チームの関わりを通して

中澤たけみ, 清水 純子, 金子 泉  
黒岩 知子, 大沢 雅美, 大須賀信吉  
白澤 亜希, 田村 康伸, 木村 聖子  
矢野智恵子, 大河原早苗, 篠崎 哲也  
尾形 敏郎 (真木病院)

当院の緩和ケアチームは、昨年1月に発足して1年が経つ。今回、結婚を控えていた31歳の悪性軟部腫瘍の患者に関わる機会を得た。そして、告知、手術、化学療法、腫瘍栄養血管塞栓術、看取り、グリーフケアまでの一連の看護を通し、患者と患者の両親、婚約者との関わりの中でたくさんの学びを得ることができた。また、それにより生じた看護師の苦悩やつらさに対してスタッフケアを行い、スタッフへのサポートも実施できた。そして、チームとしての成長を感じることもできた。今回この事例を通し、その看護を振り返ることにより今後の当院におけるがん看護の指標にできればと考え、報告する。

## 3. 食道がん患者の胃瘻造設によって得られた家族との大切な時間

吉田 一恵 (沼田病院)

社会的に高齢化が進行するなかで、高齢のがん患者が増えている。

今回、80歳代の手術不能で放射線療法終了後の食道がん患者の胃瘻造設に関わる中で、「食べる」ということの意味や、家族のために役立つという社会的意味を改めて見つめ直すことができた。

患者は、放射線治療終了後の治療効果判定は、気管へ瘻孔が確認されCV管理となった。禁食が続き、入院中、嘔声もあるためか、同室者との会話も余り無く、カーテンを閉め臥床していることが多かった。高齢者の胃瘻造設については、可否様々な意見があるが、今回、患者は胃瘻を造設したことにより、「久しぶりに腹がいっぱい」と満腹感を得る